

---

# 剣と魔法と二人の英雄

絢式 妖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣と魔法と二人の英雄

### 【Nコード】

N1920BA

### 【作者名】

絢式 妖

### 【あらすじ】

グレイダス帝国の二人の英雄。一人は金髪碧眼の美貌の騎士。一人は黒髪黒目の最強の剣士。片や帝都で権力闘争の波に放り込まれ、片や辺境の地で零どこかマイナスからのスタートを強いられる。果たして二人の運命は？△▼△△△△△△△△△△△△△△最初は戦闘描写全然無い気がします。イシュタル回は腹黒貴族か成金貴族か無能貴族、または黄色い悲鳴を上げると令嬢達が大量に登場。クロト回は内政もどきがメインになるかな？いずれは二人の物語を一つにまとめるつもり。出来るのか？そんな疑問が尽きません。

亀更新に不定期更新どころいな方読んでみて下さい。

## **prologue (前書き)**

人名、地名、国名は全て思い付きです。ストーリーもオリジナルですが、なにか気になるところがあれば教えてください。可能な限り修正します。ではでは不定期亀更新ですが。

## prologue

帝国歴433年、グレートバーン決戦。グレイダス帝国建国以来の仇敵であるアーシエル王国に勝利し、帝国を大陸における事実上のトップたらしめた戦い。長い時の流れに戦争の発端は忘れ去られて久しく、憎しみが憎しみを産む不毛な争いを終結させた戦い。なにより二人の英雄が生まれた戦いである。

一人は皇帝の弟であるイシュタルⅡグレイダス。流れる金髪に宝玉のごとき碧眼、光がちりばめられたかのごとき美貌の騎士。そしてその甘いマスクとカリスマ性に、貴賤も男女も敵味方さえも超えて人々を虜にしたまさしく英雄然とした人物だ。

もう一人はごくごく普通の農家に生まれた平民剣士クロト。イシュタルのような超絶的な美貌こそ無いが、黒髪黒目の精悍な顔立ちをした青年。二振りの剣を手に名だたる名将、猛将を討ち取った帝国最強の剣士だ。

しかし友人であり、良きライバルでもある二人の英雄は、まったく別々の道を歩むこととなる。

一人は欲にまみれた貴族の陰謀渦巻く帝都の中へ、もう一人は力を恐れた貴族に辺境へとおいやられた。

果たして二人の英雄はその場所で何をなすのだろうか？

## 始まり

帝都の一角、陽光にきらめく金髪を揺らし、その美しい青色の瞳にどこか不機嫌そうな色を浮かべたイシュタルがいた。

腰にはおおよそ実践的ではない装飾過多の儀礼用の剣――イシュタルと彼の友人クロトからすれば金で出来た金の剣――を帯び、金や銀、宝石に象牙といった思い付く限りの装飾がなされたこれまた儀礼用の服を着ている。

イシュタルの美貌からすればそれに見劣りするどころか、むしろそれらの宝飾がよりイシュタルを輝かせている。だがだからと言ってイシュタルが喜ぶとは限らず、騎士として戦った彼にとっては無骨な鎧こそ望ましい。

「おう、相変わらずの美人だなイシュタルよ。うざいぐらい輝いてて直視に耐えれん」

そう言ってイシュタルをからかうのは地味な、良く言えば渋い黒の鎧を着たクロト。イシュタルの友人であり、ライバルであり、そして同じ英雄である男。

イシュタルの苛立ちはクロトにもあった。正確にはクロトの姿にあるが、その鎧姿に整った顔を歪ませたイシュタルは小さくため息を吐き出す。それすら一枚の絵になるのだが、幸いというべきかここにいるのは黄色い悲鳴を上げる婦女子ではなく、美醜など笑って踏みにじるクロトだけである。

「クロト、済まない……」

「ふん、貴族の馬鹿共の猿知恵だろう？ そんなもの適当にぶち壊してやればいい」

今日はアーシエル王国を破った二人の英雄が一年間の治安維持を経て帝都に帰還した日であり、彼らの帰還を祝いその功績にたいして報償が贈られるのだ。

だがしかし、クロトの格好はそんな晴れ舞台に似合わぬ無骨な鎧姿、一方イシュタルは不自然なまでに飾り立てた姿。その違いを生んだのは貴族達であり、イシュタルの不機嫌の原因である。

「ほんとうにわかっていいるのか？」

しかし肝心のクロトといえどもいいとばかりに気にした様子がない。イシュタルは頭のいいクロトならこれが何を意味するかわからないはずがないと思うのだが、なにもしようとしないうクロトに不安がつくる。

「平民には英雄だろうと貴族の権威には叶わぬことを示し、最近の統治への不満を抑えつける。そんなところだろう？」

「わかったいるのなら何故!？」

イシュタル自身は三年前に最前線に出て帝都の権力から遠ざかってしまい、今では発言力などあってないに等しい。イシュタルに味方する貴族と言えは乳母のいる中級貴族や、イシュタル同様最前線へ出た戦友達だけ。だがそもそも権力と程遠いクロトならあるいは何か出来るかもしれないのだ。

「落ち着け、今は何をやっても無駄だ」

だがそんなイシュタルの期待を余所に不敵な笑みを浮かべたクロトは、ただじつと遠いどこかを見つめていた。

「……なにか手が有るのか？」

イシュタルはクロトのこれを知っている。誰もが撤退を考えはじめた時クロトはただ一人撤退を拒否、そして短期決戦のために苛烈に攻めていた王国軍が疲労で足を止めた途端、攻勢に転じ大勝利を収めた。クロトはあの時と同じ表情をしているのだ。

「今はない、今はないが……」

「イシュタル様！クロト様！こちらへどうぞ！」

借りは必ず返す、二人を呼びに来た兵士の声に遮られた言葉は帝都の空に散った。



「イシュタル、つまらん祭だが愛想は振っておけよ？お前なら貴族のご令嬢の心がちりぢり掴めるだろうよ」



「たしかに貴族とつながりを持つ足掛かりにはなるが、あまり女性を利用するような真似はごめんこうむりたいな」

迎えの兵士に連れられた二人は、パレードのための上半分が無く中に乗った人間が良く見えるように工夫された馬車に乗っていた。クロトはあくまでその人を食ったような態度を崩さず、イシュタルはそんなクロトに苦笑する。いまから帝都に住む百万近い民衆の目にさらされるというのになんとも呑気な二人だ。

「だが、そうでもしないと食いつぶされるぞ」

すると不意に瞳の奥に怪しい光を点したクロトが、じっと値踏みするかのようにイシュタルを見つめる。クロトなりにイシュタルの身を心配しての行動だが、知らぬ人からみれば危険な光景である。

「ふふっ、たしかに帝都の権力闘争はごめんだが、クロトのように辺境の、しかもクルーウエルに飛ばされるよりはマシさ」

クルーウエル、帝国北部の痩せた大地ばかりが広がる未開拓地帯のことであるが、この話は今は置いておこう。

イシュタルを近衛騎士団団長に就任させ、クロトを男爵としクルーウエルをその領土として与える。今回の戦争の報償として二人に与えられるものだが、どちらも貴族の思惑が複雑に絡まりあった上のもの。なんせどちらも本人にとって得になることなど一つも無いのだ。

戦争が終わり著しく減じた騎士の価値をなんとか回復しようとする者。英雄にこれ以上力を持たせまいと近衛とは名ばかりの無能集団を押し付けた者。他国の姫君や国内の貴族などとの婚礼には何かし

らの地位がいるからと政治の道具にしようとする者。他にも様々な思惑の果てが近衛騎士団団長である。

一方クロトの方は単純だ。平民だが英雄に何も無しはマズイ、なら男爵位をやろう、ついでに厄介なクルーウエル土地も付けてやれ。だいたいそんな感じである。クルーウエル土地で果てれば良し、もしクルーウエル土地で成功しても絞り上げれば良し、そんな考えが透けて見える処遇だ。

「ふん、貴族に愛想を振るのに比べれば数倍マシだ。だが俺に爵位と土地を与えたことを後悔させてやらねばな」

「僕だってただ利用されるだけで終わるつもりはないさ。」

もっともあの戦争で生き残り、さらには英雄と呼ばれるまでになった二人を、帝都で美酒をあおり美女を侍らせていただけの貴族が利用できるはずがないのだ。

「それでは出発します!」

そうして帝都の町へと進み出した馬車の上で、一人は獣のような獰猛な笑みを、もう一人は背筋が寒くなるような微笑みを浮かべていた。

## 始まり（後書き）

美人とは女性だけではなく男性にも使われます。作者が昔女性だけだと思っていたので一応書いておきました。

2012／1／4更新

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1920ba/>

---

剣と魔法と二人の英雄

2012年1月4日23時52分発行